

信仰への道

—柔軟な思考と硬直した思考—

植木 利彦

倉敷芸術科学大学生命科学部

(2008年10月1日 受理)

始めに

*Monsignor Quixote*¹⁾におけるキホーテ神父は、モトボの司教との不思議な出会いで司教に推挙され、同僚の神父達の妬みを買ったことが原因で町を追われた。一方、共産主義者であるエンリケ・サンカス(彼のことをキホーテ神父は、ドン・キホーテの従者、サンチョ・パンサになぞらえてサンチョと呼ぶ)は、エル・トボソでの町長選の敗北が原因で町から出て行くことになった。そうした二人が連れだって遍歴の旅に出ることになるのであるが、道中、彼らはおもしろおかしく、キリスト教の教義と歴史、共産主義の教義と歴史を比較し、時にはキホーテ神父の先祖であると思われるドン・キホーテの騎士物語に言及しながら、互いの意見を戦わせる。

「この作品の中核、あるいは興味の中心は何といっても、二人の主人公の対照と強調の劇的躍動のなかでのカトリシズムとコミュニズムを基盤とした行動と議論の弁証法的発展と融合の妙味であることは間違いない」²⁾と述べられているとおりである。そして「ドン・キホーテはスペイン人の騎士道精神の権化になるつもりであった。」³⁾という文面から、ドン・キホーテはスペインの伝統的な精神文化の再発見を試み、人々の心の中にその精神的支柱を再構築しようとしたが、当時の時代の変化と新しい文化によって無視され愚弄される結果に終わったと言える。それから何百年、同じように宗教が形骸化した時代にあつて、キリスト教とその教義を信じつつ時折それらに疑念を感じるキホーテ神父が、その疑念を払拭し純粋に神を敬う敬虔な心を獲得する試練を神の化身と思えるモトボの司教によって科せられ、疑念を抱くことが真の信仰への道であることを自他ともに再確認する旅であったことを明らかにしたい。

柔軟な思考

キホーテ神父は、彼の友人、サンカスやほかの神父たちほどの秀才でもなく、さほど有名でもないマドリッドの神学校を出て、ラ・マンチャ地方の片田舎のまるで眠っているようなエル・トボソという小さな教区の牧師として一生を終えようとしていた。彼は大都會の生活には全く無縁であったから、神学書に書いてあるままのことがらをただ鵜呑みにして、教区民に語っているだけで何の不安も疑問も感じていないように見える。また、

同僚たちの昇進に対しても敬意の念は覚えても羨望の気持ちは全く持っていない。その彼が、モトボ(異教徒の国々)の司教という神にも近い存在と考えられる不思議な人物との出会いによって、モンシニョールに任ぜられたことが同僚や上司達の妬みを買って、今一度、狭い教区を追われて、世界のなかで自分の信仰について、試される試練に直面したと考えられる。そして彼のお供をしたのが、町長選挙に敗れた共産党員の前町長サンカスであり、彼も町を出て行くことになり、二人が、キホーテ神父の先祖であると考えられるドン・キホーテとその従者サンチョ・パンサの遍歴と同じように、連れだって遍歴の旅を続けるのである。サンカスは、キホーテ神父より優れた神学校に入るほどの能力を備えた男だけに神学生時代に欲得に支配された俗世界は宗教の力では救い得ないと自覚したのか、それともその誘惑に負けたのか解らないが、宗教界を去り、政界に乗り出し、理想の社会といわれる共産主義を実行しようとした男である。俗世界をよく知る彼は、キホーテ神父に現実世界を認識させただけではなく、その知恵と経験を働かせ、機転を利かせて、キホーテ神父を危機から守っているのである。

キホーテ神父は超自然的な神の存在を信じているが、サンカスは神の存在を否定し、全てを合理的、論理的に解釈する共産主義者である。全く正反対のこの二人が、共に旅する光景は信じがたいものであるが、二人に共通している点が幾つかある。

一つは、共に人間の幸せを希求していることである。キホーテ神父はキリスト教の教義が死後の世界において人間に永遠の至福をもたらすものと信じている。そしてサンカスは共産主義が現世において人間に至福をもたらすものと信じている。彼らは全く正反対の方向に向かって人間の幸せを希求しているが、行き着く終着点が同じであること、つまり、キホーテ神父は精神面から人々の幸せを願い、サンチョは政治的また経済的な物質面から人々の幸せと繁栄を願っているのである。従って考え方によっては、サンカスの共産主義も一種の宗教かも知れない。それはとにかくとして、人間の幸福と救いを求める温かく優しい心根はこの二人に共通するものである。

二つ目は、キホーテ神父には、サンチョの共産主義をラ・マンチャ地方の司教やガリシア地方のメキシコ人のように頭から否定するのではなく、マルクスの『共産党宣言』も読み、マルクスを「善良な心の持ち主」(p.146)と理解し受け入れる精神的な幅と豊かさがある。同じくサンカスは、もとサラマンカにある優秀な神学校の学生であった。彼は神学生であった頃、信仰と懐疑を併せ持っていたので、「『信仰一つに凝り固まった教授の講義は聴く気になれなかった。それが幸運にも、わし同様に信仰と懐疑を半々に持つ教授がいて、わしはその教授のもとで、二年の間学んだ。その教授は、大学を追われた。』」(p.129)とキホーテ神父に話しているごとく、彼も柔軟な精神の持ち主なのである。このことは彼がキホーテ神父を理解できる能力を持っていることを示している。彼が、精神的支柱であった教授を失ってから、信仰一辺倒の教授達の元を去り、より現実的な人間の幸福を希求する共産主義に傾注していったことは容易に推測できるのであり、彼の共産主義理論に

対する信頼はその明るい未来への希望にある。将来、マルクスの言う理想的な社会がこの世界に出現することを夢見て彼は努力してきたのである。

更に彼らに共通しているもう一つのことは、「『党よりもコミュニズム思想そのものに信仰を抱いておられるようですね』」、とキホーテ神父がいえば、「『あんたもやはり、ローマ教皇庁ではなくて、カトリック主義に信仰を持っているようだ』」(p.236)とサンカスは言い返している。また彼は「『忠実な黨員であることを証明するが、眠れぬ夜に襲ってくる疑惑については、いっさい口にしない。わしはあんたが懐疑を知らぬところに魅了された。』」(p.238)とも言っている。サンカスは、マルクスの理論を信じて人間の幸せを追求している共産主義信仰者であるが、理想とは異なって、ソビエトではスターリンやブレジネフ、トロツキーのような独裁者が出現して、彼らによる圧政と虐殺に多くの人が犠牲となっている。彼はしっかりとそうした現実を認識し、共産主義理論の理想と現実の格差に彼は時々疑問と不安を感じているのである。それにたいして神父は「『私は懐疑で悩みぬいています。確信を持てることは何もないのです。神の存在でさえ、例外ではありません。ですが、懐疑はあなたたちコミュニストが考えるような裏切り行為ではなくて、それこそ人間的であると言えるのです。もちろんわたしはすべてが真実であると信じようと希っています。その希いだけが確実のことと感じられるからです。』」(p.238)と答えている。二人の会話からも判るように、形式化した権威ではなくて、キホーテ神父はキリスト教とその教義を、サンチョは共産主義とその理論を固く信じつつ、互いにそれぞれの信じるものに対する疑念を持っていることである。この二人のそうした柔軟な精神があって初めて Maria Couto が言うように、“The form of the novel as an account of a friendship and endearing zest of the travelers makes the process of bridging the gulf that theoretically separates them appear a practical and entirely plausible affair.”⁴⁾そして山形和美氏はこのことを、「既成の信体系のドグマや政治体制のイデオロギーへの固着的妄信に対する懐疑から出た一種の不可知論がこの二人の出会いを可能にし、彼らに自由を保障しているのであって、この自由が彼らの生への幻視をはぐくむことになった、と言ってよい」⁵⁾と述べている。盲目的に、あるいは狂信的に信じるのではなく、自分が信じているものにも疑念を抱く瞬間があるということは、それだけ冷静であり、思索的であると言える。それでこそ人間性を失っていない証とも考えられる。それ故 “They may concurrently be read as the sorts of mental dialogues Greene has been having with himself all his life.”⁶⁾

キリスト教であれ、共産主義であれ、その長い歴史の中であって未だ理想とする世界が実現されていなければ、その教義や理論に疑問を抱くのは当然のことである。「『信仰者の耳もとで、かならずや懐疑の音がささやくものだ。不確実性の自覚なくして、どうしてこの世に生き得るのか』」(p.131)というウナムーノ教授の言葉から推測すると、疑問が論理的に説明されることができなくて、疑問が深まれば深まるほど、未知なるものへの期待感も強くなることになる。「『わたしの神は、ドン・キホーテの風車と同じで、幻想にすぎ

ぬというのでしょうか。ですが、神は存在します。わたしはそれを信じているだけではなくて、触れたことがあるのです。』」(p.187)とキホーテ神父が言うように未知なるものへの信頼と傾注は個人の信仰の問題であるといえる。この疑問の深淵を飛び越える盲目的な力こそ希望であり、この希望こそ人間が生きていける糧ともいえる。その力を G. Gaston は次のように表現している。“True wisdom, having more to do with doubt than certainty, has as its primary reward the knowledge of the greatest mystery, creative human love.”⁷⁾

また、キリスト教でいうキリストの復活についても不条理であるが故に「あるかもしれない」と期待する部分に、そして地獄も「存在するかもしれない」と恐れる未知な部分に信仰が生まれると言える。つまり、キホーテ神父は、キリスト教とその教義の関係に矛盾を覚えながらも、トボーンという眠ったような片田舎で暮らしていると、その矛盾を追及するきっかけを得ることは無かったが、町を追われいろんなところを旅する途中で、キリスト教と教義の矛盾を目の当たりにし、真剣にその問題と取り組むことになったといえる。このことを最も強く学び、経験してきたのがトラピスト修道院のレオパルド神父である。彼は「デカルトの学徒であろうと志して、その結果を考慮することなく、ひたすらデカルトに倣い、絶対的な明証を求めてすべてを疑い、最後には、やはりデカルトと同じに、彼にとって真理にもっとも近いと思われることを受容することに決めた。彼は、デカルトを上まわる跳躍をした——オセラ修道院の沈黙の世界への跳躍だった。」(p.272)彼は言う、「『デカルトが、彼の到達したところを——信仰を教えてくださいました。事実と虚構の二つは、明確に区別できるものではなくて、けっきょくのところ、わたしたち自身が、どちらを選ぶかを決めなくてはならぬのです。』」(p.274)そしてキホーテ神父も懐疑の究極の果てに二者択一の選択を強いられている。「“わたしはただ神と一緒にいることを希うばかりです。そのほかのことはすべて、神がなさること——わたしは一切を神にお任せします。”」(p.212)という神の存在を信じるだけなのである。柔軟な思考に基づくこの勇敢な選択をする決意が最も大切なのである。

硬直した思考

サラマンカの優秀な神学校を出て、牧師になったマンチャ地方の司教とキホーテ神父の後任となったエアレラ神父によって代表されるカトリック教会のエリートたちは、優れた神学者たちの説をそのまま覚えこみ何の疑念も持たず、教会の繁栄と己の出世のために俗世界とはかけ離れた特異な独自の世界に生きることを正しい生き方と考えているようである。

キリスト教会であれ、共産主義社会であれ、人間を無視した冷徹な論理だけで全てが処理できると考えるのは、それらの世界の支配者たちの論理である。そして一番の問題はその確立した理論に疑問を挟まないことである。何故なら、人間は絶えず変化する可能性と複雑な事情とを秘めているのであって、論理だけで全てが判断されたり、解決され

たりするものではない。その典型が、ヘリバート神父の盗みに関する罪の重さを示すものである。盗んだ品物の価格が持ち主の収入の何割に当たるかによって罪の軽重が判断されるなどというのは論理を展開するための論理である。盗みをはたらいた人間の置かれている状況やその時の心情を無視した全く意味をなさないものであって、論理至上主義の愚劣さを示す以外の何ものでもない。つまり、論理だけでは説明の付かない現象や出来事が人間世界には無数に散見できるのであって、それらの事柄についての善悪や正邪、価値の軽重、行動の是非等は絶えず疑問のうちにある。慎重の上にも慎重に判断されなくてはならないのである。そのような精神的な柔軟性を欠く “Both the bishop and Father Herrera, represent the rigid and doctrinaire aspects of Catholicism that constantly oppose and attempt to suppress the generous spirit of simple faith embodied in the childlike character of Father Quixote.”⁸⁾ と Kelly は言うのである。

彼らは学研的、権威主義的、伝統的、孤立的、形式主義的であり、庶民の精神的支えや救済の一助を担うより教皇庁での評価や教会の財政的な豊かさの方に重きを置く。聖職者は、聖書や著名な神学者や聖人が書き残した宗教書を理解するだけでは十分ではない。また聖職者は、人々の救済者でもなければ、人々の行為の正邪、善悪の審判者でもない。ましてや表見的な事実だけで物事の正邪、価値の軽重を判断するのは危険きわまりない。人間の行うあらゆる行為は諸々の感情や、損得の計算等が複雑に絡み合った結果であるから論理のみで単純に判断しうるものではないことを理解しなくてはならない。そのような陥りやすい錯誤について A.T. Salvatore は次のように述べている。The Holy Ghost motif, mentioned on several occasions in the novel, also points toward the danger of relying on reason alone to find truth. Human reason, it seems, is too fallible to discern objective reality in a spiritual mystery.⁹⁾

キホーテ神父が言うように「『論理的な思考は往々にして、不条理な状況を導き出します。』」(p.185) それ故「『論理的な言説にはかならず誤謬が伴うのだ。』」(p.185) つまり宗教は生きている人間を相手にしている以上、聖職者たるものには、論理だけでは現実に対処し得ないことを認識し、不確かなものを重んじ、人々の苦しみ悲しみを共有しようとする心の広さが大切である。エアレラ神父のように懼れを強調するマタイ福音書を好むことは、恐怖を武器として人を屈服させようとしたヒトラーやスターリンと同じ手法である。恐怖心によって、人を導くのではなく、愛に満ちたヨハネ福音書をキホーテ神父が好むように愛と信仰の面から人間の救済と幸せを願うのが本来の聖職者の姿ではないのか。聖職者の仕事とは、生きている人間の悩みと苦しみから人々を解放するための手助けをすることである。それはブドウ園の持ち主、ディエゴが、「『ブドウの栽培は、軍需工場や土木工事とは違って、ブドウの木という生き物を相手にするから、ブドウが生きそして死んでいくのに手を貸すだけ』」(p.256) と言うように宗教も同じく愛情と慈しみをもって人の生き死に手を貸すだけなのである。それ以上でもなければそれ以下でもない。聖職者は愛と

徳を持って人々の尊敬と信頼を得ることが、ひいては人々を教会に引きつける原動力になり、人々の信仰心の高揚を促すのである。聖母マリア像を祭りの際に担ぐ役を競りにかけてお金を稼ぐ道具にするなど言語道断であり、狂気の沙汰と言える。だから、キリスト教会において献金を重視する司教や神父は、所詮プロレタリアートを搾取する資本家のような人たちと同じであり、神の愛を実践するキホーテ神父こそ無産者階級のために戦ったマルクスやレーニンそしてキリストに似た存在と言えるかもしれない。欲得に目のくらんだ司教や神父に対するキホーテ神父の怒りは、「古い騎士道物語を信じようとする世間に対して騎士道がどんなものであるかを示してやろうと、ロシナンテにまたがって、風車めがけて突進した」(p.39) ドン・キホーテと同じく真の信仰を示そうとした気概であって決して狂気ではない。

また、聖職者だからといって、俗世界から隠遁するのも間違っているのである。例えば、トラピスト修道院は神について考える場である。修行僧たちは固定観念に囚われることなく、また、政治にも教会にも影響されることなく、純粋な形で神について思索している。つまり、そのようなところが真の神の宿る場であると考えられる。しかしながら、そうした「修道院で敬虔な生活を志す若い人々の多くは、トラピスト会士の生き方こそ神の召命であり、もっとも厚い信仰のあらわれは一身の犠牲にあると思込んでいる。その無知の信仰の行き過ぎが、レオポルド神父を苛立たせた。」(p.271) 何故なら民衆の信仰は、個人のものであってもいいが、神に仕える者達にとっては、民衆があつての信仰でなくてはならない。つまり、神と民衆の間をつなぐ者が司祭や修道僧でなくてはならない。民衆の苦悩を和らげ、心の拠り所になることを第一に考えない聖職者は真の聖職者ではない。

結び

期待することが実現されることが確実である場合、いったい誰が努力することがあろうか？ 実現される途上であるから、人はその目的を実現しようと努力するのである。逆に言うならば、永久に実現されることのない希望や夢が人間を努力の方向に向けていく原動力になっている。神が存在するか否かは、永遠の答え無き疑問なのである。キホーテ神父はキリストの死と復活を初めとして、神の存在に強い信仰を持っているが、その強さは、キリストの死と復活は起こりえるのか、神は実際に存在するのかという強い疑問によってなおいっそう強められていると言える。キリストの死は確実な事実であろうが、その復活と神の存在についてはそれを証明できるような事実も理論も存在しない。それ故、キリスト教を信じていても、この点について理論的に説明できないときには、信じることができないことになる。しかしながら、そうした理論や限りない疑問を超越して、神の存在を真実として受け入れるのが信仰である。限りなく不安や疑問がわいてくるが、それでも神の存在を真実として受け入れたい願望が信仰なのである。「『神秘なくして信仰は成り立たぬとも言えるくらいだ』」(p.23) とキホーテ神父は言う。従って、キホーテ神父の行う聖餐式

の聖別されたパンや葡萄酒をキリストの血と肉とするのはキリスト教を信じない者にとっては虚構に過ぎないが、信仰を持つ者にとっては真実なのである。それはどちらの立場もそのとおりであると言えるのだから、虚構と真実とを区別することは非常に難しいと言える。最終的には、各人が決断する勇気にかかっているのである。

Notes

- 1) Graham Greene, *Monsignore Quixote* (London; The Bodley Head, 1982)
- 2) 山形 和美、『グラハム・グリーンの世界 —異国からの旅人—』(東京: 研究社、1993年) p.388-9
- 3) 宇野利泰訳、グラハム・グリーン著、『キホーテ神父』(東京: 早川書房、昭和59年) p.257 (以後本文中の引用は頁数のみ表示)
- 4) Maria Quoto, *Graham Greene: On The Frontier* (London; Macmillan, 1988) p. 201
- 5) 山形 和美、『グラハム・グリーンの世界 —異国からの旅人—』 p.393
- 6) Georg M. A. Gaston, *The Pursuit of Salvation A Critical Guide to the Novels of Graham Greene* (New York, The Whitston Publishing Company, 1984) p.137
- 7) Georg M. A. Gaston, *The Pursuit of Salvation A Critical Guide to the Novels of Graham Greene* p.136
- 8) Richard Kelly, *Graham Greene*, (New York, Frederick Ungar Publishing Co., 1984) p.106
- 9) Anne T. Salvatore, *Greene and Kierkegaard The Discourse of Belief*, (London; The University of Alabama Press, 1988) p.100

The Way to Confirm His Faith
— Flexible Thinking and Inflexible One —

Toshihiko UEKI

College of Life Science

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2008)

In the modern times when religion turns into a ceremonial affair, almost none of priests have any suspicions about Christianity and its doctrines. But Monsignor Quixote who believes in Christianity and its doctrines, sometimes has suspicions about them and is worried.

Bishop of Motopo who maybe is the incarnation of God imposes upon Monsignor Quixote to regain the pious heart and spirit after having swept off any suspicions about Christianity and its doctrines through ordeals of many troubles experienced during his travel with his friend around the western part of Spain. It is a travel for him to reconfirm that to have suspicions is the true way to believe in God.